

【書評・紹介】

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 東南アジア研究所編
『京大式フィールドワーク入門』

(東京, NTT 出版, 2006年6月, 162頁, 1900円+税)

平田 昌弘

表紙画像

発想や原理を導き出す源、それがフィールドワークである。フィールドで収集したデータは、複雑多様であり、むしろ混乱している。調査の方法や分析の手順は正しいのか、どう解釈・説明したらよいか、研究上意味ある発見なのか、単に調査者にとってのみ珍しかっただけなのか、この研究が一体何に向かうのか等、フィールドワークによる研究は多難に満ちている。フィールドワークに携わったことのある人なら、必ず曹禺する苦悩であろう。本書は、フィールドワークで得られるデータを学問として体系立てるための道筋を具体的に描いている。フィールドワークは、データを収集したり仮説を検証したりするための方法である。方法論ではあるが、フィールドワークでの試行錯誤を通し、ブレイクスルーを経て、理論やモデルを構築するに至る。そんな「フィールドワークの魅力」を語ったのが本書である。

フィールドワークに関する著書は数多く出版されている。今回、敢えて何故にフィールドワークの著書を出そうとするのか。また、京大式とはどういうことか。京都大学では、戦前の早い時期から今西錦司、中尾佐助、梅棹忠夫らに代表されるように、海外で積極的に学術調査がおこなわれてきた。その伝統は今に受け継がれ、現在も毎年多くの教員や学生たちが海外に赴き、フィールドで積極的に調査をおこなっている。そのフィールドワークの一派が、「地域研究」を掲げて研究をおこなう東南アジア研究所および大学院アジア・アフリカ地域研究研究科である。従って、本書でのフィールドワークの議論には、この「地域研究」の視座から人々の活動を総合的に捉えようとする姿勢が背景にある。地域研究とは、「ある地域という枠組みにこだわり、そのなかで緒現象を総合的に捉えることによって、新しい知の枠組みの再編、パラダイムの解体・再構築を目論む学問」である(立本, 1996)。これらの両機関では、研究対象が分野的に異なる学生や教員が交じり合い、お互いの研究内容や地域の理解について盛んに意見を戦わせている。その受け継がれた伝統の一部を、日々議論を交わす若手研究者によってまとめ上げられたのが本書である。2004年には、両機関の大学院生が中心となってワークショップ「フィールドワークから紡ぎだす-発見と分析のプロセス」を主催し、フィールドワークの技法について熱く語り合った。その時の議論がきっかけで、本書が出版されるに至った。本書の構成は以下の通りである。

内容

第1章 いま、なぜフィールドワークなのか

第2章 「問い」を立てる -フィールドでの気づきから論文の「問い」へ-

第3章 仮説を検証する

第4章 フィールドでのインタビュー

第5章 分野を超えて考える -学際的研究事始-

第6章 サーベイ型調査

第7章 事例研究

第8章 一般的なモデルの構築に向けて

第1章では、本書の目的と全体の構成とが説明される。フィールドワークの手法は、調査の目的や専門分野（ディシプリン）によって様々に変化する。フィールドワークの手法は研究者個人が独自に組み立てるものであるといってもよい。だが、フィールドでのサンプルの取り方、分析の方法、仮説の立て方、論考の展開などには、ディシプリンを超えた一定の共通ルールがあることも事実である。本書は、そんなフィールドワークをおこなうにあたっての基本的な姿勢を指し示めすことが目的であると位置づける。

第2章では、フィールドでの素朴な問いかけから学術的な問いとして、いかに立ち上げてゆくかについて語っている。フィールドワークによる研究の始まりは、フィールドでの‘出会い’にある。フィールドでは、違和感やひっかかりなど、漠然とした気づきに出会う。その出会いを既存の学問的枠組から比較検討したり、その個性を描き出すために調査場を設定したり、調査方法論を選定するなど、身近で繊細な問いから普遍的価値としての問いへと一般化してゆくプロセスについて説明する。

第3章では、第2章で立ち上げた問い（仮説）を如何に確かめるか（検証）について言及する。フィールドで取得できるデータの多くは状況証拠である。様々な仮説を設定し、検証するための様々なデータを取得することになる。フィールドワークでの仮説を検証する手法として、1) 多くの状況証拠との整合性検討、2) 操作実験の2つを挙げている。いずれにしろ、複数の状況証拠から検証することの重要性、疑似実験的な状況（特定要因の比較）を創りだすための調査対象の設定が極めて重要であると指摘する。

第4章では、インタビューする際の立場のあり方・見方が如何に重要であるかについて語る。インタビューする側の立場や態度のあり方によって得られる結果も変化するという動態性を、著者の卸売商として働いた実体験をも交えて鮮やかに描ききる。インタビューの基本は、質問者の視点から回答者の回答を解釈するのではなく、回答者の意図する意味内容を回答者側の視点から解釈することが重要であると力説する。また、インタビューによる情報に他の情報と組み合わせ、総合的に分析をおこなうことが重要であるとしている。

第5章では、フィールドワークの学際性について語る。フィールドワークによる研究は、実際の現場に起きていることを対象とする以上、複数の概念的枠組みや分析手法を取り入れた学際研究にならざるをえない。大切なことは、研究対象をじっくり観察しながら、研究者自身の思考の枠組みと方法論とを取捨選択してゆくことであると述べる。つまり、何を明らかにしたいか（目的）によって柔軟に対処してゆく態度と思考が求められている、そんなフィールドワークの側面を解説する。

第6章では、フィールドワークをサーベイ型（多数のサンプルデータを取得する調査スタイ

ル)でおこなうにあたっての、メリットとデメリット、そして、デメリットを克服するための工夫について概説する。サーベイ型調査のメリットは、要素やサンプルの比較によって、要素間のような関係を明らかにすることにある。つまりは、データを数値化して、統計処理により因果関係を明らかにするということである。デメリットは、サーベイ型調査では、サンプル毎に異なったデータをインタビューしたり、細部まで立ち入って精密にデータを取得したりしては、比較や統計処理ができないことにある。このデメリットを克服するためには、サンプルの特徴をできるだけ汲み上げることのできる記述的調査項目を設定し、サーベイ型データと組み合わせることであるという。本章においても、この定量的データに定性的データを加え合わせて、総合的に人々の活動を捉えることが重要であると解く。

第7章では、事例研究の深みについて語っている。事例研究の目指すところは、単に事例の理解に留まることなく、試行錯誤を通して、一般的な問題に答える基本的な原理を導き出すことにあるという。基本的な原理を導き出せば、事例をとりまく社会や文化、自然生態系、経済システムといった、より広域な範囲に共通して見られるシステムや制度を説明し得ることができる。ここに、ある地域での事例研究が、世界中の多くの場所で起こりうる一般的な問題に答える研究となるのである。

第8章では、フィールドワークによる事例研究から一般的なモデルを紡ぎだすプロセスについて説明する。

そのプロセスとは、1) 膨大なデータからの本質的データの選択、2) 本質的なエッセンス(基本的な原理)の抽出、3) そのエッセンスからの一般的なモデル構築という3段階より成り立っている。著者は、フィールドワークの求めるところは、狭い範囲の分野を対象にし、少数の読者を想定するような個別に特化した研究ではなく、事例から見いだした知見を、より一般的な文脈で説明することを志向した研究にあるとしている。これは、ある狭い範囲に降り立って詳細な調査をするフィールドワーカーにとっての希望でもある。

本書は、いずれの章においても優れた文献を題材にして解説がなされており、大変にわかり易くなっている。これからフィールドワークをおこなおうとする若手研究者には、是非一読して頂きたい書物である。取りかかりやすく、しかも有益な示唆を豊かに与えてくれることだろう。また、8章構成となっていることもあり、ゼミや講義などのテキストとして利用しやすい文節・分量でもある。本書を一読した時、フィールドワークによる研究について深く考え始め、自分のフィールドワーク論の改善策を友と語り始めていることであろう。それが本書の意図するところなのである。

参考文献

立本成文

1999 『地域研究の問題と方法(地域研究叢書3)』京都大学学術出版会。

(ひらた・まさひろ/帯広畜産大学)